私の叔父さん

中　三

私の叔父は、片方の足に障害があるそうです、なぜ「そうです」と付けたかというと、叔父と同居している祖母からも、叔父さん本人からも何も聞いていないからです。私はその様子も見たことがないため、母から聞いたことしか知りません。

コロナ禍ということで、祖母の家に行く機会が減り、最近は叔父と会っていませんが、今思い返せば、どんなに暑い日でもいつも長ズボンを履いていて膝から下はゴツゴツと不自然なしわを作っていました。小さい頃、叔父の膝に座らせてもらったときにその硬さに気付いた私は、祖母に叔父の足のことを何気なく聞いた記憶があります。

「なんでこっちの足だけ硬いの。」

というような言葉だったと思います。そのときは、

「なんでもないよ。」

というような返事をされました。私は、幼いながらに「聞いちゃだめだったんだ。」と感じたことを覚えています。それ以来、私の中で叔父の足のことは、気になっているけれど、聞いてはいけないことになりました。多分、私の姉も聞かないようにしていたのだと思います。祖母の家で話すとき、絶対に叔父の足のことについて触れないからです。

先日、思い切って母に叔父のことを聞いてみました。すると母は、

「そうだよね。気になるよね。」

と言って、叔父の体のことや祖母の話を聞かせてくれました。叔父が赤ちゃんとしてお腹の中にいたとき、子宮が少し狭くて片足だけ発育できなかったそうです。何の障害もなく産んであげられなかったという祖母の気持ち、他の子と同じように偏見の目で見られずに過ごしてもらいたいという願い、どちらも中学生の私にはすべて理解できているわけではないと思いますが、きっと辛かっただろうと思います。叔父が幼稚園のとき、足の障害のことに気付いた同じクラスの友達のお母さんから避けられて以来、祖母はさらに障害のことを隠すようになったそうです。今より障害がある方への考え方や理解がなかったのかと思い、悲し

くなりました。小さい頃の叔父は、足のことを友達に知ってもらいたかったのかな、中学生の頃は理解してくれる友達はいたのかな、それともずっと隠し続けているのかな、そうだとしたら辛いだろうな、と私の中でたくさんの気持ちが湧き上がりました。そう思ったのは、私が本当に辛いとき、大丈夫なのかと声をかけてもらったり、話を聞いてもらったり、自分がそのとき感じていることを知ってもらえたりすると、心が楽になるからです。私にはどんな一日だったか、何があったか、聞いてくれる家族がいます。私の生きる中で、大きな支えで安心できます。また家族以外の存在もとても大きいものです。学校の休み時間に友達と話して、気持ちを理解し合ったり、ささいなことで笑ったり、そういう中で、自分の心が元気になっていきます。当時の叔父にもそういう仲間がいたのかな、と思いました。きっと障害がある自分に不安や様々な思いがあったはずです。それを打ち明けて共有できる友達がいたのなら「障害があっても大丈夫」と自信をもてるのだろうと考えました。

今は叔父の小さい頃と違い、バリアフリーの所が増えました。パラリンピックで活躍されている方もたくさんいて、障害に対する考え方も変わってきています。叔父が私たちにも、まだ伝えていない人にも、足の不自由さを隠すことなく生活できる日が来たらいいなと思います。祖母の心に残る辛い思いが和らいで、せめて私や姉には隠そうとしないで済むようになったら、気持ちが楽になるのかなと思います。

世の中には、見える障害だけでなく、きっと、目に見えない生きづらさを抱えている人もいると思います。学校で学んだＬＧＢＴＱのこともそうです。また、友達との関わりの中で悩んでいることも、見えない生きづらさです。見てわかる障害、見えない生きづらさで悩んでいる人が、一人で心に抱えることなく、「私には、こういう悩みがあるよ」と表に出すことができて、周りの人が手を伸ばしやすい環境になったらいいと思います。その手に対して、人を大切にする心を忘れずに、ずっと手と心を差し伸べられるようになりたいと思います。背が大きい小さい、肌の色の違い、髪の毛のくせが強い、国籍の違い、体の一部に障害がある等、誰でも、それぞれ違いがあります。そ

の違いを、その人らしさとして認め合えたら、誰もが自信をもって輝けると信じます。